

早水台遺跡の再確認

八 幡 一 郎

1. 緒

昭和初年から縄文早期文化について関心をもっていた筆者にとって、大分県早水台遺跡の調査は極めて有益であり、且つ重要であった。この調査の中心をなした賀川光夫教授の異常なまでの探究心と、常に徹視的であると同時に巨視的な識見とが、筆者のみならず学界に大きな成果をもたらして呉れたのである。

早水台遺跡は昭和二十六年来数回に亘って調査された。その経緯については、賀川教授の『大分県の考古学』（昭和四十六年）に詳しいからそれに譲り、本稿では改めて本遺跡の内容を省みたいと考える。それは九州における早期遺跡の一典型であり、またその基準たり得ると考えて、筆者自らの再確認を企図したからである。昭和二十八年から同三十九年までの調査当時に比較して、斯方面の研究はかなりの前進を示しており、それらを綜観する必要もあろうが、筆者はまず早水台遺跡の位置づけをした昭年二十八年の原点に戻って、右の企図を達成したいと考えたのである。その場合、大分県教育委員会発行の『早水台』（大分県文化財調査報告第三輯）の賀川教授の綿密な記載によることとした。

2. 早水台遺跡の地学的所見

本遺跡は別府湾の北岸に連互する海蝕段丘上にあり、大分県速見郡日出町の東部に当たる早水台上にある。附近一帯は海蝕準平原の地貌を呈し、別府湾に臨むところは海蝕崖を形成して、一部には二段の海蝕台が認められる。

台地の基盤は阿蘇火山の後期火成岩である灰褐色の凝灰岩である。その上には凝灰岩が風化変質したローム状の褐色粘土層が一米平均の厚さにある。この粘土層を覆って厚い黒色の火山灰層が表土をなしている。この表土は台地上では厚さ 20 纏平均であるが、周辺の傾斜地では 80 纏に達しているところもある。

この台地の最高処は平坦であり、標高 31.75 米を示し、それが四方に緩やかな傾斜をもって下降するが、南から西にかけては海蝕崖で切られている。東側は緩やかに低くなり、帯状をなす窪地に達する。この窪地には溜池が二箇所、それに若干の水田があり、各所に人家も散在する。台地周縁に川あるいは小流のみられない早水台の地にあつて、縄文早期の人々の生活を維持し得た理由は奈辺にあらうか。早水台の「早水」という言葉は湧泉を意味するという。事実、台地の各所に湧水が認められるのである。ローム状粘土層が一種の滞水層となり、湾に面する海蝕崖の所々から清冽な

地下水を湧出している。南側の湾岸近い崖からは標高3.70米の辺にかなりの量の水が湧出している。そのような泉は崖に小さい半洞穴をつくってそこから湧出しているのである。ところで東側の窪地にある溜池はその湧水によって自然にできたものであり、水面の標高が14.50米と14.32米である。また人家の傍らの2つの井戸で測った水面は標高12.35米と14.18米とであった。このように自然湧泉に恵まれておったからこそ、縄文早期の人々は台上に定着したものとしてよい。

3. 早期遺物の散布範囲

早水台の台上平坦面、更にそれから四方に下降する傾斜面の地表には、早期の土器、石器の破片が散布している。殊に東側斜面と南側斜面とに濃厚であった。その散布範囲は台上を中心として南北300米、東西190米の楕円形の範囲、即ち台地全域に及ぶとみられる。そしてこの全域からは土器破片のみならず石鏃がどこでも採取できる。

ところで表面採集の土器片の形式は殆んど地点による差異を示さないのに、石鏃では多少の地点的偏りがみられる。すなわち、東側斜面にはその基部が内彎する二等辺三角形の石鏃が多く、その他の斜面で採集する石鏃は大部分鉞形石鏃であった。こうした地表の所見から、少なくともある程度の前後関係を示す時間経過の間、居住したのではないかと予想されたのである。発掘調査の結果はこの予想が当たっていたことを証明した。

東側斜面のA調査区においては、山形捺型文土器が全体の65%をしめたのに対して、台地中央平坦面から南斜面にかけてのB及びC調査区にあっては下層に楕円捺型文土器が多量であり、前者が後者より幾分時期が遡る居住区域かと考察されたのである。この結果は地表採集の遺物によってその遺跡の内容を見通すことの至難であることを示している。この間の消息を遺物包含の状態をみることによって考察しよう。

4. 遺物包含の状態

A調査区は東に向って平均6度乃至7度の緩い傾斜面である。表土の微粒黒色土層は厚さ上方で35纏、それより次第に深さを増して最下方で80纏である。層中には楕円捺型文36%を出し、外に山形捺型文も相当量あり、格子文3点、撚糸文7点が見出された。これを早水台第一層と名けた。第一層所出土器には、同一個体に文様の縦走横走を併用するもの、表裏に山形文と楕円文とを組合せたものが稀にみられ、器形が圀縁の朝顔状に開くものもあって、直立口縁を普通とする捺型文土器の中では異色のものである。この種の土器には植物繊維が混入している。

黒色土層の下部は粒度の粗い黒褐色土層に移行する。この黒褐色土層は上部が漆黒褐色、下部が黒褐色と区別される。土層上面の遺物群を含む部分を早水台第三層として第二層と区別した。第二層及び第三層出土の土器は口縁部に変化がみられる。すなわち、口縁部裏面に施される文様の内、原体條痕文のパーセンテージが下層ほど多くなり、これに反して第二層では原体刻文が圧倒的に多量である。また口唇素文のもの、原体押捺のものが上層に比較的多い。第二層に格子文17点、撚糸文63点であったのに対して、第三層に格子文11点、撚糸文40点であった。

次にB調査区にあっても、黒色の表土層を第一層とし、その下の黒褐色土層を第二層とし、更にローム状粘土層上面を第三層とした。各層ともに山形捺型文が多量であるが、楕円捺型文の占めるパーセンテージはA調査区に比較して相当に大きい。なおB2において住居址の一部が見出され、炉址と壁面とが認められた。これは火災を蒙ったものか、高度の火力を受けた焼土、二度焼けして赤褐色を呈し、粗鬆、脆弱となった土器片とが発見された。土器の文様は廃れて判別しがたくなっている。

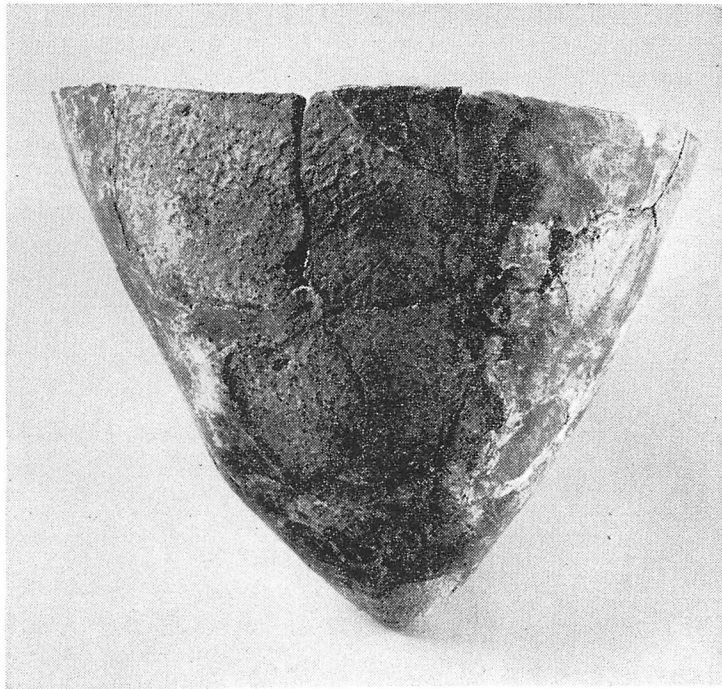
C調査区はAとBとの中間、台地南側の緩傾斜面である。

C-S地区では表土の黒色微粒層（第一層）は厚さ25纏内外、開墾、耕作によって下部の遺物が鋤き上げられたと考えられる。極めて少量の土器が採集された。山形文4、楕円文12、無文57である。第二層は土質粗く、第一層とはつきり区別され、厚さ平均25纏で、下部がローム状粘土層に接している。ローム状粘土層と黒褐色土層との間には、厚さ1纏前後の褐色土の薄層が介在するが、ローム状粘土層の表面が風化したものとも考えられる。これを第三層とする。第二層には山形文51、楕円文11、無文60が包含され、第三層からは山形文37、楕円文25、格子文、撚糸文各1が採集できた。尚第三層にはピットが穿たれ、平石が点在し、黒耀石片が夥しく散布、一部に焼土や焼石の類もみられたが、住居址だという決手はなかった。

C-M地区はC-S地区と同様平坦な丘上に設けた。黒色土の第一層は平均30纏の厚さ、褐色土の第二層が主要な包含層、その下底及び粘土層上面の第三層の状況は他と大同小異である。第一層には山形文39、楕円文5、撚糸文1が雑然と包含されており、第二層には山形文が圧倒的に多量、格子文、撚糸文も多数出土した。第三層には夥しい数の平石が配置され、多数の遺物が平石に近接して纏まっていた。その中には格子文、撚糸文が多量に含まれた。しかもこの面に形状、大きさ、深浅区々の合計25の小ピットが散在した。われわれはこれをX及びYの2住居の重複せるものと考えたが、必ずしも確証をつかんだわけではない。いずれにしても包含遺物によってA調査区で知られた時期に近い時期の遺構だと判断された。

C-N地区では第一層の厚さ50—60纏、第二層は比較的薄く20纏ほどである。第二層下の粘土層面に小ピットが亀甲形に配置されており、住居址と判断されたが、炉址を見出すことができなかった。第一層には遺物少く、山形文6、楕円文3、無文29を得たに過ぎない、第二層には無文に比して山形文、楕円文が多量に出土した。第三層或いは粘土上面では山形文25、楕円文10、撚糸文4、格子文1が得られた。山形文が多い点、これまたA調査区の状況に近い。

以上の所見から、地区、層序に徴して土器型式を分析し早期土器の存続期間が決して短くないことを確認しえたし、これとともに石器の消長にも觸れることができたのである。つまり、平面的に散開する遺物をその分布範囲内の発掘によって垂直的關係に置換えたのであった。その垂直的關係は土型器式に重点をおき、更に伴出石器の様態を観察する手懸りとしたのである。この考古学調査の常道として一見何等の変哲もないことが、当時案外に実践されておらず、名論卓説が頻出していった矢先だけに些か自画自賛に陥った次第である。



第1図 捺型文土器

5. 土器型式と編年の問題

各地点を発掘してえた土器破片、それに少量の地表採集品を加えて土器の形式分類を試みた。その結果A類として捺糸文土器、B類として捺型文土器、C類として無文土器に区別した。A及びC類は量的にはB類に及ばず、その平面的垂直的配合においてもB類が圧倒的に濃厚である。こうした意味から本遺跡は大体捺型文系の単純遺跡と称することができる。

A類の捺糸文土器は概ね下層から中層にかけて多く、上層には10パーセントにも達しない7片を得たに過ぎない。採集された163点の内55点の部位、大きさ、厚さ、胎土、焼成、色調、捺糸文の施文、方向、糸数、撚り、太さ、さらにそれぞれの出土層を点検した結果次のように要約できた。口縁が直立する尖底の極めて単純な深鉢である。胎土には長石、石英などの砂粒を多く含み、繊維の混在は認められない。成形は時に輪積法をとるにしても基本は巻上法によった。巻上げの痕跡の認められる資料もある。図上復原可能の破片では、高さ9匁から15匁までの間、高さに比して口径は1~1.5匁ほど少いと推定される。器壁の厚さは小形品で3耗、中形品で6耗、大形品で10耗内外と薄手づくりである。焼成は不充分なるもの最も多く、稍良好のものこれに次ぎ、良好なるは比較的少ない。色調は黒褐色または黄褐色を呈するものが最も多く、稀に黒色を帯びるものがある。器面にみる文様は単撚又は撚糸を棒状工具にコイル状に巻付けたものを、生乾きの器面に当てながら回転した圧痕である。これは巻上げによってつくられた器面を調整する必要から生じたものである。この捺糸文は水平方向に横走するものが最も多く、器面を垂直に縦走するものは数例に過ぎず、斜方向に走るものが第2位となっている。而して縦走するものは、横走又は斜走するものより

古い考とえられる。これら捺糸文は工具の回転によるものと、これを擦過させた条痕文とに区別できる。早水台にあつては後者が大半を占める点が注目される。捺糸文は器の表面のみに施されたものが大部分であるのが工作上当然のことながら、時に裏面のみに施された例も稀にあり、同時に表裏両面にこれを見るもの20点近くあつた。

B類は台地全域、更に各層に互つて出土している。その出土量は第二層に最も多く、A調査区で全体の59パーセント、B、C両調査区でも66パーセントに達し、第二層から第三層にそれらの主要包含部があることが知られる。第一層に含まれるものゝ大部分は、第二層以下の原包含層から長年月の間に浮遊するに至つたものと解釈される。

B類の中には山形文、楕円文、格子文など文様を異にするものがあるが、ここでは一括してその通性をみることとする。口縁が直立し、底の尖る単純な深鉢である点、A類と同じである。しかし中には口縁が多少外反または内反するものもみられる。底は尖るが、時に丸底に近いものがある。胎土は石英、長石の砂粒を含む凝灰岩の崩壊土を用いるか、凝灰岩を粉末にし、硬い粒子をそのまま用いたかである。尤も後者は前者の6パーセント程度である。このような硬質の胎土を以て成形するには、粘土を紐状に伸ばして巻上げる方法が適当であつた。中には口縁に限つて輪積し、以下を巻上げ法によつたとみられるものもある。器壁の裏面にその成形過程を示すものが数点あつた。B類では山形、楕円、格子目などを彫刻した棒状工具を生乾きの器面に回転しつつ、調整したために、それらの痕が印せられて一種の文様をなしている。この場合にも回転と擦過との別が認められる。Aの捺糸文は車のタイヤにチェーンを巻き、Bの捺型文はタイヤに必ず付ける凸凹文によつて、回転を円滑にする理と共通している。捺型文は器壁の表裏に、擦過による条痕文は口唇裏側に施されるのが常である。

B類の内山形文の最も多いのはA調査区である。第一層では他の捺型文に比し63パーセント、第二層で71パーセント、第三層で71パーセントを占める。B、C両調査にあつても、第一層62パーセント、第二層71パーセント、第三層62パーセントで他の捺型文を圧している。楕円文は山形文について多いが、格子文は各地区、各層を通じて1パーセントに満たない微量さである。しかして山形文は概して下層で高率を示している。焼成は比較的低温の火力で行われたらしく、薄手のものには器壁の内部まで火の通つたものもあるが、一般に内部まで火力の浸透した形跡を示さない。こうしたことから、永年土中であつて器壁が甚しく崩れ、また磨滅したもの少からず、中には砂粒が粗く壁面に露出した例がみられる。このように全体として焼成不十分であるといふことができる。以上のように焼不足である故に破片が小さく復原困難である。しかし口縁部や底部の破片の測定によつてみると、大形品の口径は25匁、小形品のそれは5匁内外と推定され、高さはそれより幾分小さい、この点A類と大同小異といふことができる。

C類即ち無文土器はB類と同様、各調査区、各層に他類に混じて発見される。殊に第二層に最も多く、第一層之に次ぐ。胎土はB類に比して、石英、長石を混入したものが多く、凝灰岩の崩壊土である粘土を使つている。全体としては焼成の進歩が見られない。同じC類でもA調査区のものに比して、B、C両調査区特にB調査区のものは、胎土の選択が良く、混砂量が著しく低減してい

る事実も認められる。器形は口縁が直立する深鉢で尖底である。しかし口縁は完全に直立するもの、やや外反するもの、著しく外反するものなどの別がある。但し著しく外反するものは至って少ない。なおC類の口縁に厚いたが状の隆起帯を有つもの、瘤状の突起を有するもの、橋状の把手などが数点あることは軽視できない。C類はB類に比較して大形品が多く、最大なものは口径46匁、厚さ2匁と測られた。巻上げと輪積みを併用しており、完全に輪積みのものもある。輪積みとともに注目されるのは、器面を指頭で押圧したり、撫でたりして調整した形跡があり、また口縁につまみ上げによって波状を呈するものもみられる。

以上3類に混じて刺突列点文をもつ破片2例あり、それらの類例を求めれば曾畑式土器に近似する。これらは共に第1層出土である。

なお特記すべきはA、B、C3類それぞれの内に、第2酸化鉄を主成分とする1種の顔料を塗ってから焼いたものが、丹色に発色している例が含まれていることである。A類2、B類8（山形文2楕円文6）、C類1にこれをみる。

さて3類の土器相互の時間的關係を種々なる角度から検討した結果、次のように総括した。撚糸文土器と山形捺型文土器とは第三層（黄褐色粘土層及び黒褐色土層）に多く、楕円捺型文土器と無文土器とは第二層（漆黒色土層）に集中する傾向がある。この文化層序に照して、「撚糸文乃至撚糸文と山形押型文の併用された時期から、楕円押型文が盛行し、それらが素文化する時期までの期間の推移を含んでいる」と賀川教授は述べる。この結論は賀川教授の払った努力の賜物であり、単なる机上の型式論ではない。

この結論から筆者は2つの問題が提起されているように思う。A類即ち撚糸文土器はB類に総括された捺型文土器に先行するものか、先行するとすれば、九州にA類の単純遺跡があつて然るべしとするのがその第1である。又B類の内後出的な楕円捺型文土器がC類即ち無文土器に移行解消してしまつたものか、九州におけるB類と後続型式との關係が不明瞭の中で、B類が無文化する段階を経たか否か、この現象は少なくとも九州において改めて問わるべきであるというのがその第2である。

6. 石器について

早水台遺跡では土器と並んでかなりの量の石器が発見された。それらは調査区及び層位によって種類、型式に相異が認められ、それぞれの年代的帰属を窺う資料たりうる面がある。

礫器は殆んどすべて打製石器であり、剝片に加工したものは定型化が進まず、個々に名称を付することの困難な点は、多くの早期遺跡出土石器におけると同様である。ここでは報告書に用いた名辭によることとする。

礫器及び礫核石器が計6点採集されたが、いずれも頁岩の円礫の一部又はかなりの部分を撞撃によって剝取し、刃とした簡単な石器である。内礫器としたものは一端を四周から粗く剝取して刃部をつくつたもの、刃端は尖る。長さ15匁。A調査区第三層、粘土層上から発見された。礫核石器とした5点の内2点はB調査及びC調査区の第三層から出土している。礫器としたものより幾分入念



第 2 図 礫 器 (1954年調査)

に打削を加えたもので、刃が弧状をなすもの一、その他は刃端が尖っている。大いさは13匁から8匁の間である。同種の石器が九州以外の早期遺跡からも稀に発見される。これらの石器はヨーロッパの前期旧石器の握槌（クープ・ド・ポアン）に酷似し、曾って日本の旧石器に異常な関心を示したマーリンガー博士の注意に上ったことがある。

同じく頁岩礫を大割して扁平な材を取り、所説打製石斧のように仕上げたもの4点あり、内3点には刃に当たる部分だけを砥磨してある。これら3点を半磨製石斧とし、砥磨の痕のみられぬものを打製石斧とした。半磨製のものはA調査区第二層で2点、C調査区第三層で1点を採取した。打製のままのものはA調査区の第一層出土である。これだけが安山岩質である点からしても、あるいはC類乃至それ以後のものともみられるかも知れぬ。大きさは9.5匁から5.5匁の間である。これら以外には磨製の石器はみられない。

報告書に尖頭石器としたものは、ほぼ三角形の剝片に、入念に加工して、一端を尖らせた石器である。記載された31点にあっては、硅岩16を最多とし、角閃安山岩の11これに次ぎ、凝灰岩、安山岩、粘板岩1、2点ずつである。形からa類以下五類に分けたが、a類は4匁から5匁の大きさ、各種岩石を用い、b類は長さ3.4匁から4.2匁の間、角閃安山岩を主材とし、c類は3匁から3.8匁の間、硅岩、角閃安山岩と硅岩ほぼ同数、d類は3匁から3.6匁までの長さで硅岩が過半数を占め、e類は2.5匁から3匁の長さ、大部分硅岩製である。小形のもの程硅岩質である。比較的大形のa・b・cはスクレーパーにも兼用されたのではないかとした。

上記はほぼ三角形の剝片に加工したものであるが、その他不整形の剝片を利用したものは数十点

を採集している。中には石鏃と見立ててよいものもあり、出土層位が第三層1例に過ぎず、大部分第二層である点、B類との関連を推測させる。

楕円若しくは長方に近い剥片の一端に、片面、時に両面から細かい打斫きを施した小石器で、ヨーロッパのエンド・スクレーパーに似たもの、一端のみならず側縁にも加工したサイド・スクレーパー及びラウンド・スクレーパーに相当するものなどを便宜一括して篋様石器とした。硅岩製が大部分で安山岩質のものも少々ある。大部分が3.5 匁から4 匁の大きさで、硅岩6に対して角閃安山岩及び安山岩3が出土している。主としてA調査区第三層から発見され、また同二層から3例を得たことなどから、B類の内山形捺型文土器との密接な関係が考えられる。

上記と大同小異の石器の内、比較的肉厚のものを搔削器として区別したが、特に両者の間に区別がつけられるわけではない。一例の角閃安山岩を除くと殆んどすべて硅岩質である。角閃安山岩のものは長さ4.4 匁と大きい、一般には3 匁前後である。

横広の剥片の一側縁、片面を細かく打斫いて刃とした石器を石小刀とした。記載された十例は硅岩7、安山岩2、凝灰岩1であり、横幅が6.6 匁から3.8 匁の間、3.8 匁のものは4例に上る。殊に3.8 匁の横幅をもつ一例は上縁に短い撮み様の突出部をつくって、横型石ヒの趣きを示している。これは安山岩の剥片でつくつてある。

以上の剥片石器の用材を剥取つたとみられる石核が多数見られるのは当然である。代表的なものとして硅岩及び安山岩の例を挙げた。剥片は必要に応じて適宜に使用することもあったから、中には薄い縁辺に刃こぼれのみられるものもある。

打製石器の中で定型的なのは石鏃である。早水台遺跡で採集された石鏃の数量は莫大と思われるが、今次調査によっても広い範囲からまた各層位からかなり多数を発見した。これをa式以下十一式に分けて考察することができた。

a式は基部が葉形に弧を描くもので、大部分黒耀石製、硅岩も1例あり、各調査区の第二層で採取した。長さは2 匁から3 匁の間である。b式は基部が一直線をなして三角形を呈するもの、長さ2.5 匁から3.7 匁までの間、大部分角閃安山岩製である。B調査区第三層1、第二層3、A調査区第三層1、第二層1が採取された。c式はa式の基部を多少内彎させたもので硅岩製、A、B両調査区の第二層から得られた。長さは2 匁から3 匁の間である。d式は狭長肉厚で基部の内彎が深いもので入念に加工されている。基部の両翼の形には変化がみられる。黒耀石8、硅岩7、角閃安山岩2で、A調査区では第三層より3例、第二層より5例、B調査区では第三層、第一層各3例、C調査区で第二層一例などその存続期間の永さを予想させる。d式と殆んど同型であるが、その用材がすべて角閃安山岩で只一例頁岩製を加えて、d式とした。粗い打斫きを施し、工作、外観がd式と異なる。A調査区第二層で五例、B調査区で第二層、第一層各1例、両地区とも第三層から1例も発見されていない。長さ3.7 匁から2.4 匁の間でd式より大形である。e式はd'式と同様にd式及び後述のg式と関連する型式であるが、先端を尖らすために丹念に剥取している点で区別した。硅岩製、小形(2.8~2.0 匁)、A調査区第一層から3例を得た。f式は大形薄手の剥片でつくり、これもまた基部が深い内彎をもつ。角閃安山岩5、硅岩4、長さは4.7 匁から3 匁までの間で、4 匁前後が

多い。A調査区第二層7例、B調査区第三層1例である。なおf式で特に全面をよく剥取したものの二点をf'式としたが、それも共にA区第二層出土、硅岩と安山岩とでつくり、長さが2.9纏、2.4纏で小さい。g式はd-f各式と殆んど同形であるが、内彎の挟りの深いもので、曾って鋏形鏃と呼んだものを指す。硅岩5、角閃安山岩4、安山岩3、黒耀石2と用材区々であり、B区第二層6例、第一層2例であり、これに対してA区第二層2例、C区第二層4例であり、共存土器に楕円捺型文土器が多い点から、早水台遺跡後半の時期のものであることは確かである。大いさが2.8—2.0纏の間、2.5纏前後が多いことも指摘してよいだろう。i式は二等辺三角形で基部の内彎浅く、先端と基端が著しく尖るもので長さ三纏、硅岩製で1例がA区第二層から出ている。j式としたものは極端に反る黒耀石の剥片を使用してあり、唯1例をB区第一層で得たに止まる。K式としたものも唯1例でB区第一層出土、安山岩の葉形剥片に加工したもので長さ2.8纏である。

黒色土層下の包含層から五個の円形磨石が出土した。凝灰岩、硬砂岩の円礫の周縁を磨り、両面も平らかに整えたものである。最大のもの径6.7纏×6.5纏、最小のもの5纏×4.5纏と大差なく、厚みは最大3.5纏、最小0.9纏と開きがある。これは凝灰岩のものは厚手の礫、硬砂岩のものは薄手の礫を用いた関係であろう。磨製石器が未発達であるから砥石とするより、土器製作あるいは調理の用具かと推測される。

楕円形礫の中央に窪み穴を設けた凹石2点が、これまた黒色土層下の包含層から採取された。一は凝灰岩質で径11纏×8纏、厚さ4.1纏の礫、その上下両面に深さ1纏ほどの窪みがある。他は硬砂岩質、径6纏×5纏、厚さ4.2纏、片面中央に深さ1纏の窪みがみられる。

7. 石器用材の問題

石器の用材については、大分大学学芸部の森山講師が鑑別された。それに従って個々の石器の用材が記載されたが、早水台遺跡居住の早期縄文時代人の石器製作技術、使用石器の種類、その使用を通じて知られる生産活動、生活様式の復原などに一つの有力な手懸りとなる。勿論当時における草木、骨角、貝殻その他の生活用具は何一つ残っていないのであるから、今次の発見物のみで生活全般の復原など思いもよらぬ。

石斧を含めての礫核石器が頁岩の礫を使用しており、その剥片やこれを用いた石鏃なども見出されている。

各種の剥片石器の用材には、硅岩39例、角閃安山岩19例の他凝灰岩、同じく凝灰岩中のホルン・フェルス、黒耀石化した角閃安山岩、粘板岩など数例づつが含まれる。

同じく剥片石器の一種である石鏃にあつては、硅岩31例を筆頭に、黒耀石化した角閃安山岩25例、黒耀石14例が主要なものである。なお他に角閃安山岩が数例ある。即ち早水台遺跡にあつては、硅岩が主用され、黒耀石はその半数にも充たない。尤も国東半島に沿う姫島に露頭をもつ黒耀石系の岩石が硅岩と等量に用いられたとしてもよい。九州の早期における石器用材の選択の一事例として貴重である。

さてこれらの用材の原料は概ね礫状をなしたものと思われるが、それらは河礫か海礫か或いは近

在の礫層中に含まれたものか、いづれにしても石材の選択が行われたことは確かである。そしてその資材を奈辺に求めたかを追求することは当時の人々の物資獲得のための行動範囲を究明する途である。膨大な量の土器の製作原料である粘土並びに混和物は手近に求めたと思われるが、これまた今後に残された主要案件である。

8. 住居に関する問題

以上のように広範囲に互って大量の遺物を出すことは、早水台の地が縄文時代早期にあつて、かなり永き期間、しかもかなり多くの人々が定着群居したことを示している。それは従来調査された早期遺跡の中でも全く異数の例だといわざるを得ない。

こうした長期定着を可能としたのは、四周に衣食住を充たすに足る天然資源が豊富であつたからであるに相違ない。われわれの調査した限りでは、住民の生活が別府湾に依存したことを示すような何等の資料も得られなかつた。石鏃の豊富さは弓矢の使用が盛んであつたことを物語り、周辺の山谷の原始林の中で狩猟を行なうのが主であつたと判断させる。その狩猟対象である鳥獣がどのようなものであつたかを知る術もないが、石鏃の大小、用材、鋭利さ、形にかなりの変異があるのは、その対象によって矢の使い分けが行われたのかも知れぬ。同様の意味で漁撈に弓矢を用いたことなしとしない。多くの剝片石器は獲物の解剖、腑分け、肉の処理などに適するものが多いように思われる。ただ既に触れたように、草木、毛皮、羽毛、骨、角、牙、臙、貝殻などのような植物質、動物質の遺残をみない本遺跡では、彼らの生活内容をこれ以上臆測することは不可能である。

ただ、恐らく木柱を掘立てたとみられる柱穴、杭穴が少からず検出されており、それらの内幾つかが群をなして一つの構造をもつたとみられて、住居の存在が推測されている。殊にB2区では壁面一部、炉址を伴い、しかも床面著しく火気を蒙むことを知つたが全掘できなかつた。これまでに全国各地で早期遺跡の発掘が行なわれたことは幾度かあつたが、遂に明らかな住居址を突留めたことは稀であつた。その点早水台遺跡で柱穴群を組合せて住居三棟分のプランを想定しえたことは一つの前進であつたとしてよい。縄文早期に堅穴住居が営まれたという確証は仲々に上がつてこない。この点に就いて様々な見解があるろうが、堅穴でない限り仲々に床面の輪郭がつかみ難い。若し早期に堅穴住居が営まれなかつたとすれば、住居址研究は別の角度からなされねばならない。発見石器の中に土掘具に適するものが見当らないことなども参考すべきであろうが、それにしても大小の柱穴或いは杭穴が掘られている。地表住居であればそれらの柱穴、杭穴、それに炉址、敷石などに頼つて、そのプランを推測する以外に方法ありとも思われぬ。

9. 結 び

このように幾多の問題を蔵している早水台遺跡は、その後両回の調査と前後して、丘上が大規模の土取工事を受け、遺物包含層の大部分が消滅してしまつた。従つて初次の報告書は謂わば記念碑となつてしまつた。しかし、それは同遺跡の内容を最も克明且つ正確に記録したものであり、学史上に於ける記念碑とみてもよいと自画自讃する。それにもまして、筆者にとって、縄文早期文化を研究する上に、この報告書は千鈞の重みをもっている。そのことを再確認するために敢えて屋上屋を架する文章を認めた次第である。